

# 三河 アララギ

平成二十九年 2017年

十一月号

第六十四卷 第十一号

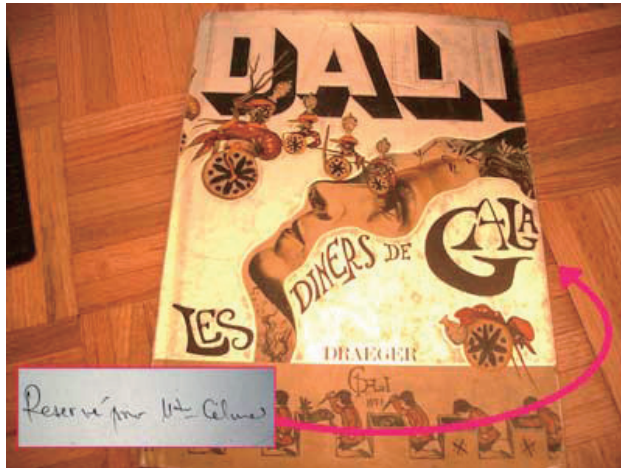


ニューヨーク日記(133) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

SUNDAY, AUGUST 21ST

## Blue Shoe Diaries



今日はアルゼンチンのおばあちゃんの90歳のお誕生日です。綺麗な花束を贈ったんだけどそれを見せるより何年か前に彼女にいただいた素敵な本を見せびらかしてしまいます！ あのダリのLes Diners de Gala！ 彼女のために特別に予約された本。グルメの世界では知らない人はいないって本、私の宝物です！

It's our grandmother's birthday today! Instead of showing you a beautiful bouquet of roses that we sent, I'm going to show (off) you what she's given me (well, ok, "us", but we all know who the bigger foodie is! ha!) a couple years ago. This is "the" Dali cookbook, Les Diners de Gala (First Edition 1973), reserved especially for my grandmother! Now, how cool is that!

# 目次

## 第六十四卷第十一号(通卷七六七号)

表紙・かぼちゃと

今泉 由利 (1)

ニューヨーク日記(133)

Blue Stone (2)

黄素馨の門

御津 磯夫 (4)

歌集「かぜくさ」

大須賀寿恵 (5)

歌集「續草々」

今泉 米子 (6)

歌集「はゞきくさ」II

河原 静誠 (7)

糸瓜忌

岡本八千代 (8)

新能

今泉 由利 (9)

細葉楨

弓谷 久子 (10)

鋭き月

内藤 志げ (11)

長閑な暮らし

林 伊佐子 (12)

薬師寺

安藤 和代 (13)

虫の声あり

清澤 範子 (14)

穏やかな日はいつ

伊藤 忠男 (15)

虫の音

鈴木 孝雄 (16)

残る月

森岡 陽子 (17)

優味

阿部 淑子 (18)

長月

足立 晴代 (19)

竜ヶ岩洞

白井 信昭 (20)

心太

杉浦恵美子 (21)

目守り

山口千恵子 (22)

孟蘭盆

夏目 勝弘 (23)

歌集「夢のつづき」

水上 信子 (24)

私の一首

白井 信昭 (25)

森岡 陽子 (25)

『ことよせ』

いーはとぶ

稲吉 友江 (26)

鈴木美耶子 (26)

吉見 幸子 (26)

牧原 正枝 (26)

石田 文子 (26)

森 厚子 (27)

山崎 俊子 (27)

三田美奈子 (27)

水野 絹子 (27)

牧原 規恵 (27)

現代学生百人一首

東洋大学

綱野 鈴華 (28)

市田 晴愛 (28)

藤川 茅夏 (28)

吉岡れいな (28)

菅原 千聖 (29)

大竹 菜帆 (29)

小笠原柚佳 (29)

永田日菜子 (29)

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一 (30)

童謡「かあさんいますよ」

高橋 育郎 (32)

『俳句』

森岡 陽子 (34)

田中 清秀 (34)

重野 善恵 (34)

今泉 由利 (35)

柳田 皓一 (35)

松本 周二 (35)

山迫 京子 (35)

植村 公女 (36)

今泉 如雲 (36)

『二茶名句集』

中 (36)

かさね吟行会

田中 清秀 (38)

『酔いの徒然』(67)

丸山酔宵子 (40)

本からのあれこれ(24)

米田 文彦 (42)

ある自然科学者の手記(66)

大橋 望彦 (44)

絹の話(84)

今泉 雅勝 (46)

楽しい時間(60)

山本紀久雄 (48)

漢詩研修(13)

平井 茂行 (50)

雑草が面白い

夏目 勝弘 (52)

『氷魚』のことから(202)

岡本八千代 (53)

『歴代天皇御製歌』(八十二)

貫名海屋資料館 (54)

みなさまへ①②

磯辺 耐 (56)

編集室だより(二〇一七年九月)

三河アララギ (58)

野菜の花(17)

鈴木 孝雄 (59)

お知らせ・「三河アララギ」について (60)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

よきことは待つとしもなく吾に来る小さくたたためる電報を置く

若竹の秀ほのみだれつつとほる風日方なるべし夏さだまりぬ

隠るなき小さき島山を移動して遺書かかざりきわれの木机

四照花やまぼうしの花白かりき谷あさくわれの軍馬を埋めてかへりき

さしなみのとなりの南瓜やうやくにわが庭に来てなりはじめたり

となりより垣のり越えてわが庭にのたくるかぼちやの蔓にくからず

住吉の楡の一首にかかはりてわがゆきしかの大阪暑く

泉涸れて引馬野はあり踏みめぐりたたへたまひし人は亡くして

吉良寺のいいぎりの実の百粒に一つ萌えたりいいぎりらしき

造語ひとつ探しもとめてすぎゆきぬ記憶あてなき日をかさねつつ

歌集「かぜくさ」

大須賀寿恵

アスパラのおどろを根元より切りはらひ冬の蒲団を干しひろげたり

わがそそぐ水にも逃げずアナナスの広葉に平ぶ青き蛙め

区切りつつ二声に啼く明け鴉吾が覚めてゐる棟のあたり

さまざまに思ひめぐりて覚めてゐしあかときの小床に聞く明け鴉

ねむり草はやく葉を閉ずまひる間の雷伴へる雨過ぐるとき

事務室に吾が押してゆく職印に一人の人の休職きまりつ

かがみぐさすすしろすすくさ季により大根の呼び名さまざまらしき

グラントの芝ひと色に素枯れつつ二羽の白き鳩何をつひばむ

くちなはののたくり庭をすぎゆきぬ頼れるはつひに己のみなり

夜半覚むるわれをめぐりて暗闇に空気流るる音かすかなり

歌集 「續草々」

今泉 米子

寒の日の夕映空に突き立てり金の樹炎の公孫樹裸木

ダイヤガラスに夕べ射す日のきらめけり調剤やうやく終りしときに

眞綿入れし古代紫のうす絹の軽き胴着をいただきました

穉子は摘み飽かぬかな瑠璃色の実をやすやすと掌よりこぼして

開かざる松毬もかまはず集むるよたまたまの幼に今日あたたかく

湿りたるわが庭山の蔭の道葱三四本買ひに出でゆく

冴え冴えとよそほ今朝の淡雪に南半球へ帰りゆく子よ

日本の手習ひ「おにまめ」祖母われの部屋に揚げて帰りゆきたり

白菜の畑の角を曲りゆくここより風に白髪乱るる

枯れ草に萌えくる青に何言はむ幼と遊ぶも不器用にして

歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

六角の石に刻める六地藏珠持たすあり杖つきいますあり

行者路に覆ひかぶさる羊歯を分けたどり着きたる塔の峰山

役小角が拓きしと伝ふ行者道を断ち切りて広し東名道路

父とともにあるがごとくにおもひつつ形見の楽に薄茶を立てる

御師僧と枯柴刈りし裏山ぞ清水掬ひしこの谷川ぞ

引馬野も安礼の埼も吾が町と証しせる石文いまここに建つ

産土の宮の古石くみかさね引馬野の碑を村人は建つ

引馬野の神の宮居の片隅にわずかに萩の一むらそよぐ

雨の日の保育には白秋の「雨」の唄うたひうたひて一日すぎぬ

園児らと水の行方を話し合ふ窓辺を激しく雨の降りつく

## 糸瓜忌

蒲郡 岡本八千代

子規忌をば糸瓜忌とも言ひまた他にだっさい獺祭忌とも言ふけふ九月十九日

糸瓜忌に夏の終りの風が吹く吹かるるままのけさのわれかな

糸瓜忌に「子規」を書かむと思ひるしにつひに書かずに日が暮れてゆく

65回形象派絵画展へ出かけゆく後ろ姿の夫を見てをり

名古屋までの外の景色は何も見えずたゞたゞただよ白き靄漂へり

赤トンボ三つ四つ七つ目の前を飛び交ひてをりわが今朝の庭

われにある今ひとときの楽しかり何かを思ひ何かを忘れて

夫の絵の八十号二作の題名は一つは「潮企」一つは「老いの夢」

海見んとつひにいのう稲生の海まで来ぬ海水低きに「善漁丸」が停泊

海辺から形原城址の大松のみどりの小山よく見えにけり



## 薪能

東京 今泉 由利

江戸の世に日本の国へ来しといふ午後の三時におしろいは咲く  
はるかなる祖母の私を呼ぶ声は「おしろいの花咲きはじむるよ」

千坪に曼珠沙華を植えおきて母はゆきたり曼珠沙華咲く

稔り田と曼珠沙華と白さぎと一つ車窓に治まりゐたる

夕風のそよと吹きくる山の端に今しはじむる飛鳥山薪能

お祓いと火入れ式と三蔵法師「大般若波羅蜜多經」と

風の音都電の音町の音聞こえてゐたり飛鳥山薪能

中秋の月の光にかがよひて大般若經三蔵法師

天竺より教典背負ひ帰りゆく三蔵法師を見送る舞台

慈恩塔の小さき窓より偲びたりき三蔵法師の行き来の方を

細葉槇

豊川 弓谷 久子

子の編みしシルクのセーター着てゆかむ敬老会に招待さるる  
萎えて来し足踏みしめて明け初めし農道今朝も一めぐりせむ

細葉槇に青き実びっしり生りてをり早朝散歩の今朝の発見

みのり田の色楽しみて今朝も行く犬ひく人と今朝も逢ひたり

憎みても詮方無けれど列島を暴れ暴れて台風進む

長袖の子のワンピース縫ひ上ぐる暑き日続けど九月も半ば

暮しよき季となりたり半ズボンタンクトップを箱へと収ふ

御津川の土手に彼岸花咲き初むる彼岸の入りと季を揃えて

派手好きの姪にパジャマを縫ひやらむ赤き布地にハイビスカスの柄

なす事のあれば楽しき九十歳にいつかなりをり自覚無きまま

鋭き月

豊川 内藤 志げ

帰り来て真向う空に暮れなずむ茜に白に廣きしまなす

夕刻より台風情報切れ間なし雨戸を閉ざさむ空はおだや穏やか

台風の藪のさわぎのその下に数多蜻蛉の宙返りゐる

予報には日曜日は雨雨を信じてかんらんを植ゑる

土日には本宮山に登る息子が午後わが畑の草を倒しに

わが他に誰が通るか台風に倒れし朽ち竹片寄せられたり

姉様の新盆祀りもなさぬままわが家の門に精霊送くる

一本のカラスビシャクは一色の緑に丸き裏見て鎌を研ぐ

一本の竹に絡まりアーチ成すへクソカズラの白花臭う

木の陰に次男と並び棒アイス白き二筋鱗雲の廣ごり

## 長閑な暮らし

岡崎 林伊佐子

平穩に農仕事をして健康とボケ防止する長閑な暮らし

畑打ちてひむがしの空の透るころ汗ににじむ野良着の匂ふ

健康の証となりし健脚に隣の町に歩いて通う

幾世代守り継ぎたる田畑でんぱたも村人は去り廃家の集落

帰省して田畑をあらす山猿と羚羊に遇うことも寂しき

ふる里に息子と二人秋分の墓まいりする山の蝸

袖口は草汁に汚れひと夏の証しの如く農良着が残れる

昼近き畑に採りて食うトマト体温に似るぬくもりのあり

枯れ草に野菜屑ませ畑に積む亡き父母のせし堆肥堆肥作りぬ

苦労苦の苦をのり越えて聴覚を失せたる嘆きも遙かとなりぬ

## 薬師寺

豊川 安藤 和代

天気予報吾住む地より孫の住む京都の天気一番に見る

風鈴が騒音と言わる今の世よ部屋に飾りて心安けし

昨日より紫式部は色の濃し涼しさ庭に虫の声聞く

切りつめたサルビアは又伸びのびて秋めく庭に大きくもゆる

吾が姿見えねばすぐに吾を呼ぶ病みて四年の夫はかわいい

ゞついて来いゞ言ったかの日の夫はどこ寝顔を見つつ若き日思う

風呂好きな喜ぶ夫の顔みれば腰痛忘れ今日も背ながす

南瓜種炒めて美味きを言う吾にハムスターだと笑う孫あり

置き場所を決めてあるのに見つからぬ品々多し秋深みゆく

祈り込め一年千羽で六千羽吾折りし鶴薬師寺に揺るる

## 虫の声あり

春日井 清 澤 範 子

長田亜子画の「いそをまつぶ」に見入りたり写真の如く吾が胸に写す  
磯夫先生の添削原稿を読み返す独特の文字にて激励されるも

朝餉の仕度蟬しぐれの中に終りたりその日の夜には虫の声あり

朝食の片付けしをれば蟬しぐれ夕食の仕度にこをろぎの声

夏休み終りて今日から登校する吾が家の前に児童の声戻る

門戸開ければ学童男女児集まりて低学年生一人遅れて

いつの間にか蟬しぐれは無くなりて台所に立てば鈴虫の鳴く

陶の鉢に日々草を植ゑにけり鉢一杯に紅白の花

武者隠し付くる部屋には西陽差し簾つるすもなを暑きかな

よろける吾の手を引く娘と買ひてこし大根ことこと煮るよ今夜は

穩やかな日はいつ　大阪　伊藤忠男

書き順の違い孫から指摘され慌て辞書引くあやふやな我

何につけ今の今まで正しいと信ずることこそ疑うべきや

数学を算数で解く難しさ右から見たり逆さにしたり

チャイム音鳴るか鳴らぬか我先きに谷駆け下りるはアケビが目当て

椎の実を拾う役目は我なりや揺らすは君の馬力が頼り

消しゴムで消すに消せないことなれど誰しも消したい過去有りや

疲れたる心身癒す道は何仕事に家庭友と答える

錆び付いた心溶かすにホトトギス鳴くや山里ヒグラシの声

オニヤンマシオカラトンボ赤トンボ棚田下りて砂浜に出る

ガソリン車廃止に動く西欧の思い背に腹変えられぬよし

## 虫の音

沼津 鈴木孝雄

日中は暑い暑いと騒げども夜の堤は虫の音涼し

Jアラートが全テレビ局占領すミサイルより怖い言論統制

遅れてたソーダガツオがやって来た小さいけれど破顔一笑

ほろ酔いで虫の音聞きつつ帰りけん楽しくもあり寂しくもあり

台風十八号日本列島縦断す三連休は災害列島

彼岸花天候不順に乱されず暦通りに紅花咲かす

紫の大きな花がまた咲いて更新剪定秋茄子促す

台風の後始末ばかり気を取られ刺されて気づく蚊取り線香

ミニトマト暴風雨にも耐えて立つ葉っぱの塩害さすが隠せず

虫よけのネットをしたのに青虫がブロッコリーの苗食い漁る



## 残る月

東京 森岡陽子

秋雨に乾かぬままに開く傘重く感じる気分と共に

声からし「そいやそいや」と宮御輿子供御輿と御はやしの連

校門に「つくつくぼうし」と法師蟬手を振る生徒等夏休み終る

儂くも力つくせり蟬時雨残る夏蟬まじる秋蟬

午後十時横に並んだ月二つ夜空の月とガラス窓の月

畦道をふらりふんわり鬼蜻蜒稲穂の先に止まるでもなく

山萩は里山の道乱れ咲く秋のひと時思うがままに

秋空に白くはかなく残る月何時消え行くや二階より眺む

秋の夕すだく虫の音それぞれに細きかよわき太く逞し

揃い立つ寺の石段そこここに彼岸花咲く今は賑やか

## 優味

横浜 阿部 淑子

裏山の栗が実りて炊き込まれ「ひと口姉へと」送られし優味

扉開け九秒九八達成は中盤からの桐生の加速

年々に百歳ごえは増え続く如何に伸ばすか健康寿命

命をば育くむ誠実<sup>まことみ</sup>を結び<sup>シヤンシヤン</sup>香香と名付くパンダに拍手

香香の命の尊厳学ぶ時人類の命守りゆきたし

彼岸花もゆる墓地には家族連れ先祖を忍び花を手向けて

## 長月

東京 足立 晴代

陽ざし受け花の笑顔のやすらぎを覚ゆる日々は幸福といふ

長雨のぬかるむ道はどこまでも続き続けてはてなく続く

長月となりて紅葉色こうようづきて錦の山の美しきかな

秋空に雲流れゆき澄む心四季折々の風情楽しも

ともびとと日々集まりて語らいもはずむ笑顔に神の恵めぐみを

竜ヶ岩洞<sup>りゅうがしどう</sup>

豊川 白井 信昭

軒先の夕闇迫りバンマツリ匂い漂ふ人來たるかも

堤防の傾斜<sup>なだり</sup>に生うマオウ扱ぐ草いきれの中ひと雨欲しい

梅田浜防潮堤下浜木綿<sup>はまゆう</sup>の花あまた咲けども見る人のなし

ま向かへる一本道遠く上空に長月の虹美<sup>は</sup>しき断片

ま昼間の暑さ避けんと妻と行く奥浜名湖の竜ヶ岩洞へ

「東海の万葉歌」本と比べ見る柳の古碑は以外と小さし

古跡碑の傍にして御影石台人麻呂詠みし旋頭歌ひとつ

洞穴は天然自然の十八度四〇〇メートル<sup>きょうへいすいどう</sup>恭平隧道

大滝の三〇メートル落差あり激つ洞内に滴飛び散る

古世代中世代の鉱物化石竜ヶ岩山の成り立ちを知る

## 心太

蒲郡 杉浦恵美子

心太突き出す作業も慣れにけり鐘鑄場地蔵の夏の大祭

子供等がめつきり減りて心太突き出し作業も間遠になりぬ

したいこととして来た今もしています幸か不幸かは別の問題

祝日も常と変らぬ我が朝は草取る刻の閑かさ探し

待つことは我にはあるまい病床に我を待ちぬし夫を思へば

ドイリーが四つも五つも出来たとて飾る壺などもうありません

台風は籠りて居ても落着かぬ嵐聞きつつ寢床の読書

平安の昔も今も青空の眩しさをこそ野分の又の日

洗濯と草取り直ぐに思ひ付く今の世私の野分の又の日

温水器壊れば銭湯ケセラセラ独りの暮しは小回りが利く

## 田守り

豊川 山口千恵子

掘り上げたる紅鮮やかなさつま芋掘り持ちつつ畑より帰る

さつま芋の泥を蛇口の水に流す紅色いよいよ色増して見ゆ

槇の木に一人生えなる蔓伸びて青き冬瓜二つ下がりぬ

槇の木に高くするするからみつつ一人生えなる冬瓜の蔓

まだ青き冬瓜二つぶら下がる日々太りゆくを日々見守りぬ

少年の掬ひくれたるメダカ五匹ホテイ葵を浮かせし甕に

種のあるブドウと断りもたらしぬ種の入りたるは普通なれども

知らぬ間に咲きて朝しほみゐる一花のみの月下美人

黄金に色付き始めし田の続くわが家は米作り止めて久しき

農道の両脇に赤き彼岸花老人会の人ら植ゑたり

## 盂蘭盆

豊川 夏目勝弘

墓地の草を取る手を止めて太陽を遮ぎりくれし雲に感謝す

御祖等みおやを迎へる準備を整へりバラの薫りの香を燻らす

盂蘭盆の三日間は萎れずに供えし花花赤白黄色

高値ゆゑ買へずにこし鬼灯を畑に居りし人より頂く

鬼灯は迎へ火そして送り火と添えし花花萎れてもよし

村里に下り行く道は獣道オハグロトンボの群れを乱して

村なかなかに続く田中の直ぐなる道低きに群れ飛ぶアキアカネのなか

風に向ひ乱れ乱るるアキアカネ我を困めるとく付きくる

御祖等と同じ飯を分ちあひまた来年と送り火を灯す

この年の盂蘭盆終へれば我歳もあと一步にて八合目となる

歌集 「夢のつづき」

水上信子

遠花火光はじけてその後の闇のすきまに音届ききぬ

夜の闇に消えゆく花火の哀しけれ天の夕顔わが遠き恋

秋空は遠く高くへ澄み渡り白根火口湖とろり静まる

さまざまに緑重なる樹の下の緑を受けてしばし憩いぬ

風渡り思い思いに樹々動く夏来るきざし木漏れ日に見ゆ

車窓より見ゆる谷間の家近く菜の花咲きをり人の住むらし

気がつけばうす紫の桐の花高みにありてはや夏のいろ

屈託をひとつ抱えて旅に出で時のまにまにふとよぎりたり

亡き友の好みし花よ水無月の雨に青色にじませて咲く

その先へ道はどこまで続くのかゴビの砂漠は行けども広し



## 私の一首

日本列島誕生のことテレビにて今日は知りたり大陸移動説

白井信昭

ロシアから朝鮮半島にかけて太古の昔、大きな地殻変動により、大陸から引き千切られた二つの島が海を互いに向きを変えながら東へと移動後合体。以後二回の大変動を経た結果、現在の日本列島が形づくられたという説。

犬達は獣医の往診大歓迎も注射器見つけさつと逃げ行く

森岡陽子

今年も又狂犬病ワクチンの時期になり獣医さんが往診して下さった。やさしい先生が大好きな犬達は大喜びで玄関に迎へに行く。何時もの通り少し遊んで頂いた後「さあ、注射しましょう」とワクチンの準備、注射器をめぐりとく見つけた犬達は逃げ出してしまった。四匹を一匹ずつ捕まえ、チクンと注射。犬達も済めばケロツとした顔に。

『いじよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

何一つ料理覚えず嫁したる娘作りし味は我のその味

孫かへり静かになりたるこの夕べ夫と二人の線香花火

稲吉友江

「鰻の日は鰻を食べよ」父言ひきしみじみ語る今宵この友に

子規宛での「いいのは少し」と書いてある漱石の手紙集今日は買ひたり

鈴木美耶子

朝取れの夫が作りし赤きトマトミキサーにかけ二人で飲まむ

さて我は仏具磨きと立ち上がる軒の風鈴チリンと鳴れり

吉見幸子

御自分の最後の部屋は真白きにと薰りもそへてカサブランカを

教本は胸に置かれてその脇はいつもの様に鉛筆に消しゴム

牧原正枝

僅かづつ詰めて一人の席つくる待合室の空気爽やか

空蝉が車道にひとつ転がりぬ拾ひて脇の木の陰に置く

石田文子

誘はれて七夕まつりの笹飾りゆれる路ゆく人波の中  
盆すぎて姦しきときはかりそめの如くに思はるけふの安穩

森 厚子

蟬の声に混ざりて子らの遊びある声も聞こえ来今日の夕ぐれ  
水撒きす瓶の中にも水しぶき赤き金魚も浮きつ沈みつ

山崎 俊子

朝まだき八王子神社の鈴をふる末の弟の平癒ねがひて  
「とうせい濤声」とふ魁夷の襖絵のブルーの色心にしみつつ夫を思ふ

三田美奈子

あの夏の記憶呑み込み元安川今は陽に映えまどろみてをり  
八年めの忌日静かに暮れゆきぬせめて全ての灯明点さむ

水野 絹子

わがスイカ暑きさなかに芽を出し小さきながらも赤き実となり  
どこまでも進歩を望む世なれどもわれは大根の種を播きをり

牧原 規惠

## 現代学生百人一首

東洋大学

母親になんでもかんでも略すなど言われるたびに時代を感じる

千葉県立流山南高等学校一年 綱野 鈴華<sup>れい か</sup>

「おはよう」と声かけられたその日にはいつもと違う景色が見える

千葉県立流山南高等学校一年 市田 晴愛<sup>はる え</sup>

何回も書き直しをしたラブレター君からすればただのファンレター

千葉県立流山南高等学校一年 藤川 茅夏<sup>ち なつ</sup>

お母さん電話に出ると声変わる父はつぶやく女は怖い

千葉商科大学付属高等学校二年 吉岡 れいな

必死にね揺れる車窓にしがみつくと蛙みたいに強く生きたい

香取郡市医師会附属佐原看護学校一年 菅原千聖

ころもがえそでにうでを通すとき服から香る秋のはじまり

足立区立千寿桜堤中学校二年（東京都） 大竹菜帆

庭先に赤く一輪ひがんな細き肢体に水晶の玉

鷗友学園女子中学校二年（東京都） 小笠原柚佳

名前書く白くきれいな教科書にキュキュつと音する春のよろこび

鷗友学園女子中学校二年（東京都） 永田日菜子

## 萬葉秀歌の鑑賞

### 津之地直一

吾が背子はいづく行くらむ奥つ物名張の山を今日か越ゆらむ

吾勢枯波 何処行良武 己津物 隱乃山乎 今日香越等六(①四三、当麻真人麻呂の妻)

(口訳) 吾が夫の君はどの辺を通って居られることであろう。名張の山を今日あたりは越えて居られることであろうか。

当麻真人麻呂が旅に出た後で、その妻が家にあつて詠んだ歌。第三句の「己」は「起」の通用字で、意味は従来「沖つ藻の」と解していたが、沖のキは甲類、「起き」のキは乙類で仮名違いになるので、この説は誤となる。それで今は「起」の終止形オクを借りたもので「奥」の意とし、奥の物の隠るといふかかき方次第の「なばり」(「隠る」の意の古い動詞に「なばる」(「自四」)がある。言葉の「訛」も「なばり」の音転で正しい言い方が隠れている方言的言い方の意と解される)の枕詞となつて見ると見る説によるべきである。そしてその「なばり」を更に同音の地名の「名張」にかけているのである。名張の山は三重県名張市の西の、大和堺の山を指し、大和から伊勢へ出る通路に当つている。一首自問自答の形をとり、旅にある夫を思いやるしみじみとした妻の心が感じとられる。茂吉は「この歌は古来秀歌として鑑賞せられたのは万葉集の歌としては分かり好く口調も好いからであつたが、

そこに特色もあり、消極的方面もまたそこにあると謂つていいであらうか。併しそれでも古今集以下の歌などと違つて、厚みのあるところ、名張山といふ現実を持つて来たところ等に注意すべきである」と言つて居る。

吾妹子をいざみの山を高みかも大和の見えぬ国遠みかも

吾妹子乎 去來見乃山乎 高三香裳 日本能不所見 国遠見可聞(①四四、石上大臣)

(口訳) 我が妻をいざ見ようと思う(が)、その「いざみ」という言葉の名とするいざみの山が高いとてか、それとも国の遠いためであらうか、大和の国が見えないことであるよ。

いそのかみのおほまへつきみ  
石上大臣(天武紀に石上朝臣麻呂とある人、慶雲元年ハ七〇四年Vに右大臣になつてゐるから、この前歌の当麻真人麻呂の旅と同時の、即ち持統六年(六九二年)三月の伊勢行幸の際の歌と見ると、まだ大臣でない時の歌ということになる。)の従駕の作。第一句「吾妹子を」は「いざ見む」と懸詞的に第二句に続けた枕詞である。然し又一方「吾妹子のいる」大和の見えぬ(ことよ)」という詠嘆にも暗黙の関連を持つて働いている句でもある。いざみの山は松坂市の西南十里余、奈良と三重との県境にある高見山がそれだとされている。「―を―み」の形が名詞の資格で「かも」が接し、その「か」は「見えぬ」の「ぬ」で結ばれている。人麿作のような流動的な声調は持たないが、なお万葉の古調を保つた秀歌である。

童謡 「かあさんいますよ」

高橋育郎 作詞

カエルの赤ちゃん ポチャポツチャン  
水にもぐって 遊んでいたら

かあさんどこへいったのか

コロロンかあさん どこにいる

さがしていたら かえってきたよ

ああ かあさんだ とびついた

きつねのぼうやは 山のなか

あそびつかれて かえってみたら

かあさんいなくて さびしいな

コンコンかあさん どこいった

いつになったら かえってくるの

なきべそかいたら かえってきた



かっぱの赤ちゃん 川のなか  
おうちへかえろう いわのかげ  
かあさん どこへいったのか  
まってもなかなか かえらない  
かあさんこいしと なきだした  
そしたらかあさん かえってきた

うさぎのぼうやは 原っぱで  
あそんでいたら まいごになった  
ゆうがたくらくなってきた  
はやくおうちへかえりたい  
めそめそしくしく なきだした  
そこへかあさんとんできた

『俳句』

大仏の肩越しに沈つ秋夕焼

森岡陽子

山裾の鎮守の杜はうすもみじ

暮れ六つの鐘の響きや葛の花

田中清秀

若武者の月代青き菊人形

到来の梨食む孫の齒切れ音

重野善恵

雨の中ソイヤソイヤと秋祭り

二十三夜の月招きけりひとり酒

今泉由利

太陽にしばし重なる秋の月

菊人形花入れ替へて刀差す

柳田皓一

降り続く台風過ぎて淡き空

高原の霧より夜の明けにけり

松本周二

葉鶏頭老人ホームの庭元氣

谷戸の田の色染め分けて早稲稔る

山迫京子

子規庵の庭を廻りて杜鵑草

いさぎよく誤りてをり涼新た

植村公女

車椅子の目線に慣れし秋麗

床上げと決めひとり身の今年米

世去れてふ切なき節や盆の風

今泉如雲

お目当ては津軽の酒や菊臈

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

撫子や地藏菩薩のあと先に

子供等を心で拝む夜寒かな

佛さへお留守なりけり秋日和

膝抱て羅漢顔して秋のくれ

美しや障子の穴の天の川

月と月そもくゝ大の月夜かな

# かさね吟行会

## 「寺家ふるさと村」 9月

田中清秀

今回のかさね吟行会は田園風景が自然のまま残る寺家

(じけ) ふるさと村を訪れた。平成二十九年九月八日、田園都市線の青葉台駅から鴨志田団地行きのバスで二十分ほど、住所は横浜市青葉区れつきとした市街地でありながら豊かな緑の林や森、そして田んぼが広がっている。また、ここに在る田や畦、畑は近郷の農家の所有地であり勝手に入ることや作物を取ったりすることできない、散策路を外れて自由に森には入れない、そういうルールである。もちろん草花や昆虫の採集も禁止となっており自然環境を守っている。

継がれきし谷戸の田畑に秋の色  
弥生期を今に繋ぎぬ稲の花

素山 由利

「稲の香」は郷愁を誘う。春の水田に植えたばかりの稲葉、稲の花咲く頃の淡いかおり、秋の早稲から稲穂の垂れ下がるまで、そして稲刈りの藁と糊の匂いなどその

時々異なる香りが有る。そこになんとも言えないあじわいがある、よくぞ日本に生まれけりと思う。そして今日の田んぼはまだ青みが残る稲葉に稲の穂が黄金に色づきだしている。もうすぐ里は収穫期を向かえる。きつと刈り取りの後は稲架(はさ) 掛けて天日干にしたお米ができるのだろう。

うす衣のごとくに青き秋の雲

周二

田刈前畦の草刈機

皓一

一步ごとばつた追ひ出す畦の道

清秀

日本には秋をテーマにした歌が多く有る。「だれかさが見つけた、小さい秋見つけた・・♪」「静かな静かな里の秋・・♪」、そして「ふけゆく秋の夜旅の空のわびしき思いにひとり悩む・・♪」など口ずさみながら歩く、そんな気分にはさせるのはこの里の長閑な景色のなせる技であろう。また、近くには水車小屋もあった。このような水車は古びて動かないものが多いがこの水車は勢いよく良く回っている。小川の清水を引き集めて流しているらしい。

水車緩き動きや名残の蚊

さち子

陽光にとんぼ横切る田んぼかな

れい子

無花果を横に這わせて谷戸の畑

京子

森林の空気にも良い匂いが有る、そして風があり、音がある。マイナスイオンが溢れているのか清々しい気持ちになれる。木々の上の方でつくつく法師が鳴いている、とんぼが草の先に止まっている。そんなのんびりとした木陰に女性二人がお茶とお握りを持参して語らっていた。きっと孫の自慢話だろう、あるいは嫁の愚痴だろうか。いつまでも語らい尽くせない昼さがりがあった。

つくつくし鳴き尽くしをり里の森  
葉の下も葉の上も伸ぶ葛の花

清秀  
陽子

寺家ふるさと村四季の家にはウエルカムセンターが置かれている。そこに掲げられたふるさと村の憲章に「自然や農業は私たちにとって宝物だ、中略、人も同じ生き物だから思いやりとやさしい気持ちを持たずにいたい」とある。地域の農業振興と山林や農地の自然環境の保全と活用を目的に昭和五十八年から村作りを始め今も続けている。また、ホールギャラリーには周辺の散策情報や昆虫の標本、季節の野草の写真などを展示して来訪者の利便を図っている。因みに九月の野草はノハラアザミ、

ヒヨドリバナ、ナンバンキセル、ツリフネソウ、ヤマハギ、ヤブタバコなどを紹介している。きっと散策の道脇にこれらの野草の幾つか咲いていたはずである。昼食は四季の家にあるレストランで済ませ、句会は研修室を借りて行う。いつものとおり囁目三句四句選で行われ参加人数が少ないながら楽しい一時を過ごした。

寺家ふるさと村では初夏に蛍が見られるという。「夏は夜、月のころはさらなり、闇もなほ蛍の多く飛び違ひたる」と枕草子にあり一千年も昔から親しまれてきている蛍、今は見られるところが少なくなつた。今度は浴衣姿で見に來たいものである。

■ かさね吟行会 ■

日時 十一月十日(金)

場所 清澄庭園内涼亭

集合 五時(食事つき)

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

## 『酔いの徒然』（六七）

丸山 酔宵子

### 『ユダヤとイスラエルと安全と』

敵対する中東諸国に囲まれ、将に四面楚歌の建国70年を迎えるイスラエルは、やれ、ヒスポラだ、シリアだ、空爆だと「常在戦場」常時危機一髪。しかし、イスラエルの防衛態勢と治安は皮肉でもなんでもなく世界一。首都テル・アビブや聖都エルサレムをはじめ、隈なく国中に最新探知防衛システムを張り巡らしているイージス国家なのである。

はじめてイスラエルを訪れた20年前、パレステイナとの和平が進んでいたラビン首相時代。週末の混雑しているテルアビブの繁華街を歩いている時、突然パトカーが慌ただしく止まり、武装ポリスが周辺一帯にバリケード

をめぐらし、通行人を止めたのである。恐る恐る様子を見てみると、ピストルを持ったポリス達とともに可愛らしい小さなロボットが出てきて、道路に放置された不審なバッグに近ずき、抱えているピストルでバッグを打ち始めるのである。結果として何の反応もないことで、即座に警戒は解かれたのであるが、その時間はたったの5分程度。恐れ入った警戒・通報・準備・対応であることに驚いた記憶がある。

このようなハイテク国家を造り上げたユダヤ人とは、勿論ユダヤ教を信じる人々ではあるが、基本的には「ユダヤの母から生まれた人はユダヤ人である」とされ、男子の場合は生後即割礼。アインシュタインをはじめ、今までのノーベル賞受賞者の約90%がユダヤ系であるそうだが、ユダヤ人の頭の良さの根源は、子供のころから膨大な旧約聖書（特にトーラー「モーゼ五書」）を読み、その行間の教えを自分自身で必死に考える訓練が徹底し



ているからだそうだ。

世界から集まったユダヤ入植者達は、土漠の荒地を北のガリラヤ湖から中南部の砂漠までパイプラインを埋設し、ハイテク農業・水産・畜産で野菜、果物、花そしてキャビアやフォアグラまでを生産し、輸出までしている。ワインでもハイテク技術を駆使して、ヤルデンなど素晴らしいワインが出来上がっている。特にユダヤの歴史の富豪であるロスチャイルド家の肝いりで造られた「CARMEL WINE」は世界的な評価を得ている。

今、我が国土は北朝鮮の米領グアム沖へのミサイル攻撃の脅威に晒され、無遠慮にも我国上空を通過するとう。同時数発のミサイル発射では対応できないとの見解もあり、もし誤って落下すると思うと、晩酌も落ち落ちしてられない。

迎撃成功率90%以上。イスラエルの誇るミサイル防空システム「アイアンドーム」。ミサイル攻撃発射を10秒

以内にレーダーで探知し、墜落予想地点を計算してから21秒以内に人口密集地に落ちると判断されたミサイルに對してのみ迎撃ミサイルを発射撃沈。砂漠等に落ちるミサイルは無駄打ちせず無視する優れモノで、それも同時に数百発にも対応できるそうだ。

我が日本防衛軍も充分承知のこととは思うが・・・。

星空に冴える星屑野分あと

酔宵子

本からのあれこれ (24) 米田文彦

「江戸川柳2」

これが本当に江戸時代の作なのか、と思うくらいに人情に変わりはない。

本降りになって出て行く雨やどり

おまへがた本降りだよとじゃまがられ

かみなりをまねて腹がけやつとさせ

江戸中を越後屋にして虹がふき

(越後屋は日本橋にある江戸第一の呉服店。雨降りには傘を貸すから、夕立が終わる頃には越後屋と大書した傘が江戸中に散っている。)

泊り客少しは義理の朝寝する

(朝早く目が覚めても少しは家の物音をうかがつ

たり、頃合いをみて起きる)

飲まぬ奴弁当喰ふと花にあき

(酒を飲めぬ人の花見、あとは団子だけ)

桃太郎供のけんかに困ってる

(お供は犬と猿と雉子。犬猿の仲だからさぞや・) まだ桃は流れて来ぬに子は寝入り

木葉屋聞いてきなよと子を帰し

(葉の名前は覚えにくいし間違えたら大変だし、家に帰ってもう一度よく聞いてきなよ。)

駆けて来て口上の出ぬ子の使い

子の使い垣から母が跡を言ひ

(子を使いに出したが口上をうまく言えるかどうか、そつと跡をつけて聞いていると廻らぬ舌で先方もよく分からない。垣根の外から母が補足している。)

子をひとつにらめておいて申しわけ

(我が子をぐつとにらんでおいて、母はお詫び) そんな子もいつの間にか悪さもするようになる。

あれと出るなと両方の親が言ひ

(友達の良いつが悪いんだ)

人は人なせ帰らぬと親父言ひ

(よからぬ所へ行くのにつき合うことはない!) 親のすね今をさかりとかぢるなり

生酔の水千両に値が決まり

初めてはおやじがはずす朝帰り

(息子も大人になったなあ)

愛想のよいをほられたと思ひ

(それは個人の希望的観測です)

夢に見んしたと真赤なうそをつき

(遊女。夢では嘘かほんとか分らない)

いやな男も来ようなと浅黄言ひ

(浅黄、田舎侍。自分がそれとも気づかずに)

姉女郎吹出すような伝授をし

(ペテランが新米に接客法を指導。惚れたと見せ

かける法、お金の絞り方、嘘のつき方、その他

いろいろ、横で聞いていると可笑しくって・・・)

ほれたのを通詞ひとりがおかしがり

(外国人が遊女に惚れての問答を通訳する。聞いて

ていられない言葉を真顔で通訳しなくてはなら

ぬとは・・・)

なんののかんのあつたけど、結局あれと夫婦になった。

でもだんだんとまた遊び癖が出てきて、

立ち聞きは今来たように内へ入り

女房の知恵は花見に子をつける

あねさんがたんとゐたよと尻をわり

(お目付け役に子供を連れて行かせたけれど、あ

ねさんがたくさんいる所に行つてしまった)

朝帰り旦那が負けて静かなり

こんどから行きなさんなと仲直り

しかし、浮気は男の専売とは限らない。

町内で知らぬは亭主ばかり也

ここきりの話とやたらふれちらし

旅立ちと号し間男捕まへる

そして年月は過ぎる。

母の名は親父の腕にしなびてゐる

(親父の腕に「おはな命」などと母の名前が彫っ

てある、それもしなびていてやつと読める)

結局のところ、運が七分のこの世界。

琴になり下駄になるのも桐の運

だそうです。

ある自然科学者の手記 (66) 大橋望彦

『虫のあたま』

昆虫の脳はどの程度働いているのであろうか。この働き方が判ると、色々な事に利用することが出来るのではないであらうか。昆虫の種類は極めて多いのだから、中には、とてつもない機能を持つている奴もいるに違いない。こういう機能を発掘出来れば人間改造も面白くなる。などと、途方もない事を考え出したらば、少し昆虫のことを調べたくなってきた。其処で少し本を当たってみたところ、あるある、先人たちは、随分色々な事を研究していることが判った。でも、どんなに先端技術を駆使して、遺伝子の組み換え等で新しい生物的なものを作り出せるようになっても、とてつもない機能を持った生物を作り出せるような知見は仲々見付からない。これには、既成概念が働き、今知られている機能を他にも利用できないかと、考えることが先行するからではなからうか。そこで、もっとマクロなアプローチの仕方、例え

ば、昆虫の目玉は複眼であることはよく知られているが、人の目が二つしかないのに大変な機能の動員によって、正常なものの方が出来ているとすると、この複眼のそれぞれに入ってきた情報を瞬時に解析して、統一的な指令にまとめて行動に繋げる機構というものは、一体どうなっているのか、という事は余りよく知られていない。神経索が電氣的に信号解析をしていることは判つていても、その統一機構と行動の指令とは繋がっていない。子供の頃、トンボを捕まえるのに、手をぐるぐる回しながら近づいて、トンボがその手を見て目をくるくる回している隙に、サツと捕まえてしまう。これは何となく年上の子や、親から教わってきたことであるが、明らかに、複眼で見ている情報と、行動にラグ（間隙）があることを示している。ところが、蠅叩きでは、そんな事をしたらば、直ちに逃げられてしまう。ハエにはトンボのような視覚情報と行動の間にラグがないか、あっても極めて短い。このラグの差は判らない。

そもそも、脳みそは、ハッキリした解剖学、若しくは、系統発生的な見地からすれば、脊椎動物に存在するので、無脊椎動物の昆虫類には存在していない。それで

も、扁形動物のプラナリヤとか、頭足動物のある種や、ウミウシのような原索動物、それに。昆虫のような節足動物に見られるように、無脊椎動物でも。脳に似たような神経の塊り、神経索、神経束と言われるような組織が観察されてはいる。また、そのような組織では、他の組織が脳の働きをするように分化することを抑えてしまう抑制物質（タンパク質の一種で、*non-darake*、日本語では少しふざけた名前）が知られてもいる。そうであるならば、脳でないからと言って、無視することもない。その原始的な機能に、目指す面白いものが沢山潜んでいるのに違いない。

人間の目で見ても、或いは思い込みで観て、蟻の行列の所々で、蟻同士が向き合い触覚を触れ合いながら挨拶を交わしていることをよく見掛ける。何らかのコミュニケーションをとっているのであるが、こういう言葉が判ると面白い。それにしても、昔の人は凄い。『ホタルよ来い。こつちの水はアーマイぞ。』と呼びかける。虫に日本語が通じる訳もない。それに、虫に甘い辛いが判るのか。虫の欲望はどんなこと、食欲、性欲、独占欲、保全欲、快適な生活欲、……未だどんな欲望があるの

だろうか。地上の虫は空を飛びたいのか。空を飛んでいる虫は水に潜りたいのか。水中の虫はもっと速く泳ぎたいのか。……他にどんな欲望があるのが判ると面白い。知りたいことが一杯出てくる。人間の欲望なんか小さく見えるかもしれない。一方では、底知れない恐怖を常にかけているのかもしれない。人間はなんと鈍感なのだろうか。人間は恐怖感を余り持たないのかもしれない。虫のようにもし予知能力が優れているとすると、どうなるか。ストレスが強すぎて、短命な生物となってしまうのではなからうか。それに、予知能力が移入されると、人間は夢を見ることもなくなってしまうのではなからうか。そうなると、人間が支配力旺盛な世界を形成するのかが。それとも、平等を望む世界が出来るのであろうか。そのとき人間は生きるということをどのように考えるのであろうか。只々動き、繁殖し、寝て、食べて、死ぬ。それだけでよい人間となると、脳みそは昆虫化してしまうのか。……あんまり昆虫の脳の勉強をするのは止めておこう！

## 絹の話 (84)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 「蝉翼 火因霧・綺麗」

昨今、デパートなどで薄い絹のストールを売っていると、お客様から「蝉の羽のようで、きれい（綺麗）ですね」とよく言われます。

女性は古来から、透けた様なもの、軽いもの、柔らかくサラサラしたもの、艶やかに輝くもの、チラチラ揺れる物が好きなようです。

絹はその全てが網羅されていて、化学繊維が全盛の今日でも、繊維の王様の地位が揺るぐ事はありません。

中国の昔の詩に

薄きこと蝉翼の如く 軽きこと火因霧の若 (こと) しろ  
いう句があります。

この句の解釈には中国特有な「白髪三千丈」的な表現という意見もありますが、1972年に中国湖南省、長沙市郊外の馬王堆漢墓から出土した副葬品の中に、常識では考えられないほど保存状態の良い、錦、羅、紗、綺（綾織の一種？）など沢山の絹織物があり、最も薄い物では、丈128cm、桁95cmの単衣物（ひとえもの）で絹の部分

が25g位という超薄物がありました。これぞまさに蝉の羽根より軽い「紗」なのでしょうか？

上記の詩句は貴婦人が着用して歩く様を描写して詠んだものと思われませんが、「打ち掛けが蝉の翼の様に薄く、風が吹けば霧のようである」とは、決して誇大な表現ではないことが証明されました。

当時の繭は小さく、蚕から吐糸される糸は今日の $\frac{2}{3}$ 位の太さで、5本採りの細い糸（10デニール位）が使われていたようです。

光の透過実験をすると細い糸の方が下に着ている物の色が表に浮き出して見え、艶やかです。

ですから今でも古物修理などには繭の大きさをその時代のものを使わないと、当時の色艶を再現出来ません。

### 綺麗（きれい）の語源

中国の殷、周の時代高貴な夫人たちは絢爛豪華な錦の着物の上に蝉の羽の様に軽くて薄い「綺」という打ち掛を着たようです。

綺とは地紋のある紗の様な織物であったようで、重厚な錦の上に重ね着して、錦が透けて見え隠れする様に作られ、光による乱反射で不思議な陰影を醸し、さらに地紋による増幅が加わり、通常、麻を着ていた当時として

はこの世のものとは思えないほどの美しいものであったと想像されます。

贅をこらした錦を直接見せるよりも薄絹を通して、奥ゆかしく着こなす事がその時代の教養ある人の所業であったようです。

この事は平安時代の十二単でも、色を重ねて着て、薄絹を通した重ねた色のみやびを表現し、一番上に唐衣を着る習わしは、中国の古くからのそれが伝わったものではないでしょうか。

現在の和装の花嫁さには中に白無垢を着るので、外に着る打ち掛けを豪華にし、内と外が逆になっているのは面白いと思います。

麗（れい）とは鹿が群れをなしてゆっくり通り過ぎる様をいう言葉で、スット伸びやかな脚と緑に映えた艶やかな鹿の肌が当時の人には美しく目に映ったのでしよう。

綺をまとった貴婦人の近くを鹿の群れが通り過ぎる様は美しさの極みであったのでしよう。

そこから綺麗という言葉が生まれたと云われています。「きれい」とは薄絹を纏った貴婦人に光が差し込み、上着が僅かに風になびいている様をいったものです。

## 高度な染織技術

古代中国の殷の時代には、すでに蟬の羽根の様に薄い絹織物を作って、重ねた色を楽しむといった、今日でも及ばないほどの高度な製糸、織、染織技術が発達していた事は古墳の発掘からもうかがえます。

製糸技術とは繭から1本の糸口を見つけて忽（こつ）という糸を揚げ、5本束ねて撚りをかけ極細の糸を作っていたようです。その糸を滑らかで艶やかにする精練技術も今日にも劣らないものです。

さらに、自然染料（麻などは染まりにくい）を駆使して絹ならではの発色技術を完成させていました。

甲骨文字の中に色の三原色赤、青、黄の他に紺、緑、紅など糸偏を書く文字が記されています。

糸、即ち絹ですので、絹によく染まる色である事を示しています。草木染めの多くは紫外線に弱いので、染めては日に干し、それを何回も繰り返し、対光堅牢度を高めていったと思われれます。

## 羽振りが良い

羽二重の語源は「羽振り衣（たえ）」から転嫁した言葉とも言われ、絹を着て闊歩する様を形容したもので、今日でも使われています。



## 楽しい時間 60

山本紀久雄

2017年9月28日

### 遊牧の民モンゴル・・・その二

前号で次のようにお伝えした。

《生粹のモンゴル遊牧民は野菜をあまりとらなく、植物繊維の代替はヒツジの肉であって、胆のう以外のすべてを完璧に食として利用し、そして、ヒツジは自ら解体する。》

季節的には、夏は乳製品の「白い食べ物」が主力、冬は肉「赤い食べ物」が主となり、家畜を殺すことで対応する。モンゴル語では「殺す」と直截的に表現しない。「トゥフールフ」「バザーハ」（準備する）、または「ザラハ」（使う）といった言葉になる。ヒツジの屠り方は「腹割き方法」で、モンゴル語で「オルルフ」という。モンゴル帝国時代から伝わっている方法で、血を流さなく、地面を穢さない」と。

このヒツジの屠り方「腹割き方法」、モンゴル語で「オルルフ」とは、小刀で胸部を少し割いてから素手を突っ込み、人差し指と中指で心臓近くの大動脈をひねるようにつまんで切断し、即死させる。

実際にこの「オルルフ」を遊牧民が目の前で実演してくれた。

確かにヒツジは即死した。それまで眼球が開いていたものが閉じた。悲鳴も上げずに。最初は気持ちが悪いくちおらず見ていたが、遊牧民の手業がすごいので、いつのまにか感動して作業を見続けた。

なお、トルコ系の遊牧民は、イスラム教徒であるが、家畜の頸を切断し血を流す。

さて、ヒツジを絶命させた後、皮と肉とを分離させて、皮を作業台のように広げていく作業に入った。

この皮を剥ぐ作業はモンゴル語で「オプチフ」といい、小刀で胸から腹にかけて縦に一文字に割り、四肢も一文字に割くが血は流れない。さらに続く技も見事である。

ここからは刀を用いない。代わりに使うのは拳で、拳を皮と肉の間に入れ、皮から肉を剥がしていくのである。圧倒され見つめるのみである。

皮を剥がした後に、内臓を取り分ける。四つの胃、小腸、大腸、膀胱、脾臓、腎臓など取り出す。最後は皮のみが残る。この日、屠られたヒツジは4歳雌、30キログラム。

作業順序にそって写真で紹介したいが、最初の手で即死させる場面と、最後に皮一枚になった写真のみとした。作業時間は2時間くらい。本当にすごいと思う。



さて、モンゴル人が大相撲の関取に大勢なっている。横綱の白鵬、日馬富士、鶴竜はじめ相撲界を席卷している。どうして、これほどモンゴル人が強いのか。何か背景理由があるのでないかと思ひ、いろいろ資料探していると、以下の見解に出あった。

モンゴル人の特性について、駐日モンゴル国大使館で商務・経済担当を務める、ルンダー・ダワー・ジャルガル参事官が2015年12月語った内容である。

《歴史的に見てもモンゴル国民の多くは遊牧民であり、遊牧民同士があまり近寄ると家畜のえさとなる草がなくなることから他人と接触する機会が少ない。お互いの空間を尊重し、人のことにはあまり入り込まない。遊牧の生活ではさまざまな決断を自分でしなければいけないので、完全な個人主義である。そのためモンゴルではいじめは比較的少なく、逆に言えば他人に対して淡泊とも言える。モンゴル人には家族は裏切らないが、ビジネス関係では他人には容赦がない、弱肉強食の感覚がある。

それでも、自分たちの間合いと言える住んでいる空間に、客や見知らぬ誰かが入ってきた場合には、広大な自然の中ではそれが生死の問題であるため全力で助ける。しかし、遊牧生活では助けた人とはもう会わないため、助けても見返りを求めず、恩を売らない。助けられた方も感謝はやたらとせず、恩を返さなければとは思わない。

やって当たり前なのに感謝をしたら逆に失礼で、怒られることもある。それに謝ることも恨むこともさほどせず、謝っても延々と謝らず、相手も間違いなどは大目に見る。

朝青龍問題に関しては、モンゴル国民にとつてはおそらくそれほど大きな問題を起こしたということではない。これは広大な土地に家族のみで住む遊牧民と、地域に根差して仲間意識が高く、社会性を持ってみんなで力を会わせて作業をする農耕民族との大きな違いがある。

「建前」も今日会って、明日会わない遊牧民民族であるモンゴル人には理解できないことである。モンゴルには「言霊」文化があり、悪いことを言葉にするとそれを神が聞いて実現しないようにすると考えられているため、思っても口に出さない。総じてモンゴルの国民は、とても前向きで楽天的な国民である。時間管理に関しては、例えば「何時までに必ず着きましょう」などと言うのはタブーで、神が怒って途中で邪魔すると考えられている。言ったことは本気で捉え、例えば「また来ます」「検討します」「またやりましょう」など建前をそのとおりに受け取るので、モンゴル人には建前を口にせずはつきりと言わないといけない。以上のことから、実際のところビジネスマナーの点からはモンゴルはまだまだ発展途上である》

個人主義だと言っているわけで、これがモンゴル人の強さなのだろう。モンゴルを終える。

漢詩研修 (十二)

千代田岳精会 平井茂行

慈恩塔に題す  
じおんとうにたいす

荊  
けい

叔  
しやく

漢 かん

国 こく

山 さん

河 が

在 あ

り

秦 しん

陵 りやう

草 そう

樹 じゆ

深 ふか

し

暮 ぼ

雲 うん

千 せん

里 り

の

色 いろ

処 とこ

心 こころ

傷 いた

ましめぐるは

無 な

し

漢國山河在

秦陵草樹深

暮雲千里色

無處不傷心

【作者】 荆叔（生没年不詳） 出身地も官歴も、いつさいわからぬ人物である。詩も、この一首を残すのみである。詩の内容から唐末の人とみる。

【解説】 大雁塔から四方を眺望して時世を歎いた詩。

【語訳】 \* 慈恩塔：長安（現在の西安市の郊外）の南にある慈恩寺の境内にいまも残る七層の仏塔。大雁塔のこと。高さは約七〇メートル。三蔵法師がインドから仏典をもち帰り、その仏典を保存するために建てた塔。慈恩寺は貞觀十二年（六四八）の建立。\* 秦陵：秦の始皇帝の陵墓。西安市の東郊。驪<sup>り</sup>山の北麓にある。\* 暮雲：夕暮れの雲。\* 千里色：はてしなく空をおおう雲の色。

【鑑賞】 大雁塔の上からあたりを見渡せば、漢以来の都の榮華を示すさまざまな跡と、地上最高の權力をほしいままにした始皇帝の陵墓が、遠く近くに望まれる。そして、これらを包むようにして山や川がめぐり、草木が生い茂る。人間の営みのはかない移り変わりと、それをよそに変わることのない自然の、冷やかな対比が胸をしめつける。杜甫が「国破れて山河在り 城春にして草木深し」と詠ったのとよく似た表現であり、感慨である。清の沈徳潜<sup>しんとくせん</sup>は、これを偶然の暗合と評しているが、どうなのだろうか。杜甫の詩が「安祿山の乱」による眼前の荒廢を詠うのに対し、荆叔の詩はしだいに傾きゆく国運を自然の色の中に見るといふ趣きが感ぜられる。詠いぶりは極めて格調高く、盛唐の氣風を思わせるものがあるが、詩中にひそむ「滅びの歎き」は、やはり唐朝の末期の作であることを示すだろう。それにしても、夕暮れの雲のたれこめる下、しだいに黒ずんでゆく都の眺望は、まことに印象深い。

## 雑草が面白い

### 夏 目 勝 弘

(雑草と抜き捨てられるキキョウソウ我が庭なかの花園となる)  
の一首が出来たことにより。雑草をも少し調べてみたくなった。

今年より除草剤の使用止め、必要な雑草のみ残し、他は抜き取ることにした。一種類の雑草のみを残し育てると。ほかの雑草が余り生えてこない。

夏になり、枯れて種の落ちたキキョウソウを、全て抜き取った跡に、いち早く芽生えてきたのは、アカカタバミである。芽生えしたい抜き取つて行く。カタバミは根が広がり生長すると抜いても根が残る。雑草を二本一本手で抜くことによつて、種類によつて、それぞれに秘めている特長が違い、雑草が面白くなつてしまった。

新聞の広告で(雑草と楽しむ庭づくり、著者は、オーガニックな植木屋さんの曳地トシ・曳地義治氏・築地書館)を手に入れ、参考にすることにした。

自分の庭に必要な所を書き出した結果的に引用文が多くなつてしまった。それだけ雑草について何も知らなかつたということである。雑草を生やさない方法では、七種類ほど書いてあるうち(刈る・抜く)ことにした。

雑草を庭で生かす方法では、キキョウソウとユウゲシヨウとした。生やしておいてもかまわない場所は、前庭以外の裏庭等は、刈りそろえは遠目では、芝と見た目は変らない。

草取りの方法は、根こそぎ抜く、刈りそろえる(歯のない電池式の草刈り機を購入)

草取りの時期は、五月中旬ごろまでに若いうちに抜く、今年は気が付いたらすぐ抜いた。

雑草が生えなかつたら、たちまち砂漠化してしまう。我々が自然と共に生活してゆくには、雑草とよい関係を保つことが大切になる。

そのためには雑草の一生のサイクルを知ることが大切になる。  
曳地氏の雑草の生活史より

雑草の一生、一年草は発芽→生長→開花→結実→枯死を二年以内で行なうもの。

二年草・発芽→生長→開花→結実までに一年以上かかるもの。  
根に栄養をため、株に力を付けてから花を咲かせる(オオマツヨイグサ) なかには数年たたないと花を咲かせないものもある。

多年草二度発芽生長すると毎年花が咲く、一年中、地上部が残っているもの。地上部が枯れても、地下は休眠中で残っている。ススキが代表例、またドクダミ

雑草の形からの分類

直立型・直立した茎に葉をつける。ヨモギセイタカアワダチソウ  
ロゼット型。実際に葉が広がり、茎に葉をつけない。タンポポ・オオバコ・ロゼットがなくなるもの、ロゼットを残すもの。ナスナ・ヒメジオン・ハルジオン。

分枝型・茎が下部から枝分れし、主軸がはつきりしないもの、スベリヒユ・ハコベ。

ほふく型・茎が地表を這い、節々から根を下ろすもの。シロツメクサ・カキドオシ

叢生型・茎から多くの茎が出てくるもの。多くのイネ科の雑草。  
つる型・ヘクソカヅラ・ヤブガラシ・クズ。

いままでは外観的に感じていた。こうして分類して見ると、いっそう雑草が面白くなってくる。狭い我が家の庭にも、すべての型の雑草が生え、そして繁っている。

## 「氷魚」のことから (202) 岡本八千代

子規の糸瓜忌も過ぎて一週間。

ちやうど今から十年前に独りで根岸の子規庵を訪れたことがあった。……当時の古い小さな手帖も出てきた。その中に、

「何もかも夫をも忘れて根岸に来ぬ根岸の秋のそよ風吹き来」

私の歌がうすく鉛筆書きであった。また、

「寢床で読む論語一冊をバックに入れてけふは根岸の子規庵へきぬ」

君に会ふ企てほぐれてただひとり上野の森の木もれ陽の中

なんて歌も粗相な字で書いてあった。

急に懐かしい思い出が甦ってきってしまった。

そういうえば、鶯谷―うぐいす横町あたりを上根岸(根岸の里)といつて、東京の北端のことらしい。「おぎょうの松」「笹の雪」ここは豆腐料理で有名今は裏坂通りへ移転。私は、ここでひとり豆腐料理を一品注文して食べた。私の食べている処を全く知らない人が写真に撮った。あの時は、写真に撮られても疑わずちよつとにこつととしてしまったなあ。また、「鶯亭」では岡野の汁粉といつてお汁粉が有名。私は、ここでもまたお汁粉を。上根岸には音無川という川が流れている。いい名前だなあ。なんて思った覚えがある。そして、手帖に

は、「三河島あたりで「写生」という意味をさつた」と書いてあった。おそらく子規の「写生説」の悟りのことと思う。

平成十九年十二月号に載つた私の歌。

「目の前につひに在りたり子規庵は簡素なる門太き珊瑚樹」

「石段を二つ上りて門に入る静けき秋の明治がにほふ」  
初めて訪ねたあの時の子規庵。今は、もう少し違っているかも知れないが――。

子規庵の庭を歩いたこと。庭に小さな立札があつて、そこに「萩桔梗撫子など萌えにけり」の子規の句と、寒川鼠骨の「三段に雲南北す今朝の秋」の句が書いてあつた。私は鼠骨の句に何かすかつとした美しさがあると感じたなあ……。

そうして、私はその夜「セレッソ」という小さな宿屋に泊つた。たしか、サッカーの団体にそんな名前があつたことを思いながら一夜を明かした。なぜなら、その夜は、子規生誕百四十年の記念の催し事があつたからであつた。私はその会に出席した。会は、作家(早稲田大学教授)の堀江敏幸先生の、自作朗読とトークがあり、丸山薫の詩などを中心に「ものを書くという行為と抒情性」についての講義があつたから。そして、詩人(多摩美術大学教授)の平出隆先生の「子規についての小さな話」の講義もあつたから。

「セレッソ」に泊まる時も警察へ行つて、女ひとりどこで泊まつたらよいかを聞いて宿をとつたことも思い出す。

今回は私の子規庵への思い出ばかりを書いてしまったこととお許しあれ。

## 「歴代天皇御製歌」（八十二）

賈名海屋資料館

「明治天皇」第二百二十二代・在位一八六七年（十六歳）——一九二二年（六十一歳）

明治天皇は、孝明天皇の第二皇子。幕末の政情混迷のなか、薩長に対し「討幕の密勅」を出され、江戸幕府第十五代將軍・徳川慶喜は、政権を天皇に奉還。「王政復古」。「鳥羽・伏見の戦（戊辰戦争）」。「王政復古を諸外国に布告」。「神佛の混淆の禁止」。「五箇条の御誓文」。「明治維新の宸翰（天皇から国民への手紙）」。「新政府による「政体書」」。「救荒の勅語」。「慶応四年は、明治元年となる」。「皇居を京都から江戸に移され、江戸城西丸を皇居と定む」。「萬機新裁の詔」。「本格的な明治日本がはじまる」。

御年十八歳、明治二年「政始」。「皇學所開講」。「御講書始」。「歌御會始」。皇居の中に「公議所」「修史局」。

北海道函館の五稜郭開城、戊辰戦争終結。

「西南の役」。「軍人勅諭の發布」。「教育勅語の渙発」。「大日本帝國憲法の制定と御告文」。「上諭」。「勅語」そして国会の開設。「日清戦役」。「ロシア・ドイツ・フランスによる三国干渉」。「日露戦役発生」。「国民精神の頹廢を戊申勅書」。

「御生涯中のしきしまのみち」御詠草の九万三千三十二首。一首一首に、実人生における生活体験を表現された御詠草であられた。

(明治十一年以前)

をりにふれて

臣どもと駒はせ行けば大庭の梅の匂をちらす春風

國

人もわれも道を守りてかはらずばこの敷島の國はうごかじ

日本武尊

まつろはぬ熊襲くまそたけるのたけきをもうち平ひらげしいさををしも

述懐

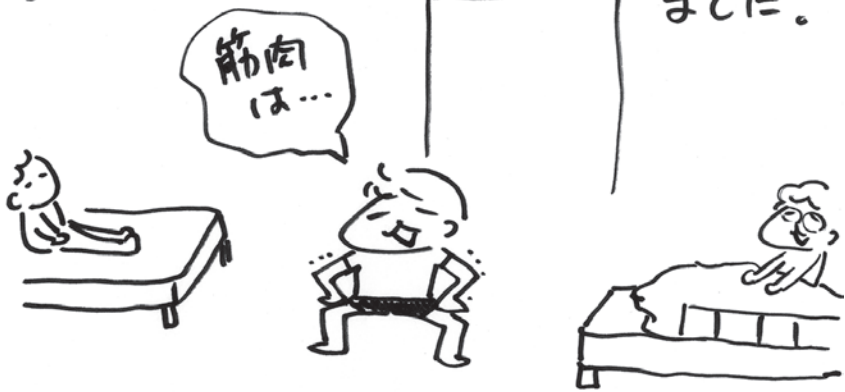
いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと

逢友述志

きのふけふ長き春日を我と臣と昔の書ふみのものがたりして

# みなさまへ①

4人部屋です。  
「あんた..どこが悪いの?」とツッコまれました。



## 磯辺 耐さん紹介

私「脳動脈瘤が爆ぜる」と診断された日がありました。セカンドオピニオンなどを経て「何事もない」とわかりましたが、自分を自分で守ることを思いつきました。身体のバランスを整える筋肉トレーニングをしようと、指導下さる「磯辺 耐さん」を知りました。そして、身も心も安定して暮しています。皆様と分かち合いたく、彼女の「靭帯損傷闘病記“みなさまへ”」を掲載させていただきます。

明日、朝イチで手球です。がんばります!!



# みなさまへ②

このように  
チューブをつかって  
ストレッチも  
筋力も...



バットの上で「マイチューブ」  
をつかっていろいろやっている  
ほしい... という感じだったので、「やって  
みます? 親指をひっかけで...」とレクチャーしました。  
amazonで同じものをを3つ、買いました。  
明日、あさって頃、自宅に届いたら、おがーさんが  
姉に運んでもらう手配をしました。大きい  
スマイルをはりたいぐらいです。

## 編集室だより【二〇一七年九月】

○横浜市青葉区寺家<sup>じけ</sup>、自然や農業は宝物だ。遠い昔からこの土地には、すべての生命をいつくしみ、重んじてゆくことの素晴しさが根付いている。寺家ふるさと村へ吟行。私達が育った。時々そのまま残っていて、身も心も若がえるのだった。

○「堀派神崎流舞の会・研修会」にお招きいただきました。日本の伝統芸能「型」を通して伝わる「心」に思いを馳せました。立ち居振舞い、絹の光沢、金の輝き。素敵な空気に包まれました。

○東京芸術大学美術館。シルクロード特別企画展、素心伝心、クローン文化財、失われた刻の再生。

なんでこんなに大勢の人がいるのだろう。とびつくりしてしまった目的の美術展をあきらめ、帰ろうとしたとき、「素心伝心」とみえた。東京芸大の、劣化が進んでいる文化財の本来の姿を、現代に甦らせる復元の特許技術にクローンとして甦った作品に、びつくり。

パーミヤン東大仏天井壁画。キジル石窟航海者窟壁画。敦煌莫高窟第57窟、法隆寺金堂壁画、などなど。すごい技術です。本当に本当の仏様達の近くに居られる気持でした。目近におられる法隆寺釈迦三尊像（クローン）「やつとお近くに」。ありがたく思いました。

○「ヤクルトホールへ」No.67、カンツォーネ大集合」。

学生時代、カンツォーネが大好きで、イタリア語を習い、イタリアへ行くつもりだったのに、急にアルゼンチンへ行ってしまった。その時代の思い出が、忘れ去る直前に蘇った。

○豊橋閣日進禅寺。鞠子姉が、これからずっと、ここにおられるお墓。すっかり私に刻む。

○漢詩研修会、九月度

「慈恩塔<sup>じおんたう</sup>に題す・荊叔<sup>けいしやく</sup>」

解説に、大雁塔から四方を眺望して。とあった。西安に行ったことがあり、大雁塔すなわち慈恩塔に登ったことを思い出した。三蔵法師がインドから持ち帰った。仏典を探しまわったけれど「塔」以外には何も残っていなかったことがよみがえった。仕方がないから慈恩塔の窓から、シルクロードを偲んでいたのだった。この漢詩に出逢えたことが心底うれしい。

○「第十五回飛鳥山薪能」

会場は、私が毎日通っている飛鳥山の野外舞台。「狂言・二人袴」「能・大般若」。

雲間から中秋の名月。薪に火が灯され。素晴らしい御膳立てのもと、面白く「二人袴」が演じられた後、「大般若」ってどんなこと。と思っているうちに、三蔵法師が、孫悟空、猪八戒、沙悟浄と障害をのりこえて経典を得る様子が上演された。大変な旅をされて、経典を持ち帰られた。そして仏典を保存するために建てられた塔「慈恩塔」。

## 野菜の花（17）

鈴木孝雄



○ チャイブ

この写真は、今年5月6日に撮影。花茎の先端に、2から3cm径の玉房状で赤紫色の花を咲かす。花が揃って一面に咲く様は、なかなか見応えがある。

チャイブを栽培してみようと思ったのは、フランス料理の飾りに乗っていたアサツキのような野菜を見た時。フランスでもアサツキを使うのかと尋ねてみると、チャイブと言う香草とのこと。調べてみると、花が可愛いので、4年前種まきから始めた。栽培は容易で花に満足。あえて希望を言えば、花期が2週間程度なので、もう少し長かったらと思う程度。

「チャイブって何？」とよく訊かれる。そんな時は「アサツキに似た細葱」と答えている。チャイブの別名はセイヨウアサツキ、宣なるかな。英語名がChivesなので、そのまま日本名にしたようだ。

チャイブの原産地はユーラシア大陸。中国では紀元前3千年に食用された記録があるほど歴史ある野菜。しかし、栽培されるようになったのは、ヨーロッパで16世紀頃から。

葱類は特有の臭いがあるので嫌うむきもあるが、チャイブの臭いは強くない。そのため、薬味として多くの料理に使われている。スープに入れる、オムレツ・ポテトサラダ・バターなどに混ぜ、色を添える。まさに名脇役。

葉に加え、花がエディブル。サラダに混ぜれば、華やかなサラダになる。

チャイブはキッチンハーブとして適している。日本料理にも使えるので便利だ。葉は冬期には萎れてしまうが、ほぼ年中、また毎年収穫できる。今回はブロッコリーの花の予定です。

## お知らせ

△十二月号の原稿は、十月三十一日(火)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月原稿の返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美